

福山市立女短大

○増田茅子

増田智恵

三好百々江

**目的** 日常生活に対応しうる婦人衣服スカートを設計するとき考慮されなければならないゆとりへの要因を求めめるため3回の着用実験を行った。結果を報告する。

**方法** 被験者は19.3～19.6キの女性、負数は第1, 2回が4名、第3回が7名である。被験服スカートのパターンのW.Lには2.5cm, H.Lには4.0cmのゆとりをいれ、裾線の寸法は蹴上り18cmの階段を昇る際の膝関節位置における包圍寸法とした。被験服材料はいずれも綿100%であるが第1回はブロードとデニム, 第2回は材質の異なるブロード, 第3回は同材質のブロードを使用した。裁断した布の裏面には前後中央線から左右に、H.Lから上下に各10cm間隔の平行線を引き着用実験後の被験服の変化を知るための基準とした。被験服着用は1日8時間続けて1週間である。第2回の実験では自転車エルゴメーターを使用して主観調査を行った。着用実験後被験服を解体し裏面の10cm方眼を写しとりもとのスカートの形態におき直し、この置き直したパターン上の各スカート構成基準線を計測して考察の資料とした。

**結果** 第1回着用実験では使用した材料が起因してスカート構成基準線の変化があることがわかったが第2回では特に材料の布の横の伸び率が要因として大きく寄与していることが明らかとなった。又被験者の体型、着用時の行動も大きな要因であることがわかった。第3回着用実験では被験者に起因する要因が多くあることが実験結果から示唆された。本研究は衣服研究振興会の助成による研究の一部であることを明示し謝意を表します。